

解 答

- 問1 ア なまあたた「かい」 イ 効率 ウ 群がり エ ひょうし オ 全く
カ 先制 キ え ク 負い目 ケ 徒競走 コ 訳
- 問2 高井に古くてボロい家を見られたことが恥ずかしかったし、また、雄二とのケンカや全然行っていない発弾探しのことなど、話題にしたいくないことを高井が聞きにきたのだらうと推測し、なるべくその話にはふれたくないのであえて無愛想にふるまっている。
- 問3 オ
- 問4 自分にとっては楽しくなかった小さい頃の境遇や、格好つけていたことなど、さらに友達と遊ぶ楽しさを知ったことや「仲間だ」と言われてうれしかったことなど、話しにくいことも正直に話していると感じたから。
- 問5 雄ちゃんと仲直りしたい気持ちはあるものの、自分から謝る気にはなれないので、素直に「うん、仲直りする」とは言えないでいる。
- 問6 ウ 問7 ウ 問8 エ
- 問9 ケンカした「僕」に対して意地を張っているため、素直に会って仲直りしたり見送ったりするのは体裁が悪くてできないものの、「僕」が家に来てくれたことはやはりうれしく、「僕」のことが気になりそっと様子をうかがおうとしている。
- 問10 放課後にドッジボールをしたとき、前の週にけんかをして一週間口を利かなくなっていた友達もさそってみました。はじめのうちはおたがいにボールをぶつけるのもぎこちなかったけれど、時間がたつうちにうち解けてきて、最後には思い切って投げ合うことができるようになりました。友達と遊ぶことで以前より仲よくなったような気がして、楽しいなと思いました。

解 説

- 問2 「ぶっきらぼう」な態度をとるのは、①相手を歓迎しないので早く帰ってほしいと思っているとき、②恥ずかしさや照れくささをかくそうとしているとき、③相手が話題としている話をしたくないので話題をそらそうとしているとき、などである。この場面でそのようなことにあてはまることがないか考える。まず、①であるが、高井は「鼻持ちならない感じがやっぱりする」とはあるものの、いっしょに不発弾探しをして「以前よりは打ち解けた」ことや、『おう、高井』 僕はこっちにこいよと、手招きした」とあることから、歓迎しない、早く帰ってほしいという気持ちはあまり考えられない。次に②であるが、「洒落た高井の家とは似ても似つかない古い家だ。恥ずかしい思いがした」から、「ボロい」家を見られた恥ずかしさがある、その恥ずかしさをかくすためわざと「ぶっきらぼう」にきいたということは十分考えられる。次の③であるが、「で、何の用だ？」と「ぶっきらぼう」にきいていることから、高井の用＝話に対してあまりふれたくないと思っていることは大いに感じられるであろう。「僕」は意地を張ってケンカした雄二と仲直りできないでいるが、高井が雄二との仲直りを勧めにきたことはなんとなく感じていて、その話題にはふれられたくないために「ぶっきらぼう」な態度をとったのである。
- 問3 ケンカの内容ははっきりとは書かれてないが、「雄ちゃんに意地悪されていた高井」とあることや、「雄二が言うにはクブンちゃんはその子の肩ぱっかり持つクってふくれてんだ。男のくせにヤキモチ焼いてんだね」という雄二のおばさんの言葉から、雄二が高井に対して何か意地悪なことをし、それに反発した「僕」が高井の肩を持って雄二とケンカになり、最終的には「僕」が雄二の家の仕事を「うんこ屋」とバカにしたことから二人の仲が決定的に険悪なものになったことが想像できる。「僕」は「悪いのは雄ちゃんだし」と言っていることからわかるように、非は先に意地悪をした雄二のほうにあると思っているので、謝るなら雄ちゃんのほうから先に謝るべきだと考えているのである。
- 問4 高井のしゃべっている内容から考える。高井は、「僕」と根岸くんと小木くん（雄二）の三人が仲良しなのについて「君ら、いつも三人で楽しそうじゃないか」「ふざけてると楽しそうで、うらやましくてさ」と正直に思いを語り、また「バカだなあって思うこともあったけどさ」と相手が嫌がりそうなことも思ったままに言い、さらに自分のことについては「習い事ばかりやらされていたから……仲のいい友達がいない……仲間はズレにされるのがいやだった……ほとんどの男子からは嫌われると思ってたけど」など、言いにくいようなこともかくさないで話し、「小木くんがさ、お前も仲間だって言ってくれたらう、うれしかったな」と、「僕」らに対する気持ちを正直に告白している。
- 問5 「なんで、オレが謝んなきゃいけねーんだよ」と雄ちゃんとの仲直りを拒んでいた「僕」が、「考えておく」と言うまで態度を軟化させたのは、高井が自分のことや「僕」たちに対する気持ちを「妙に素直にしゃべり、仲直りを勧めるので、やはり仲直りしようかなと気持ちが動いたから。ただ、「僕」は雄ちゃんに対して「意地を張って」いるため、素直に「仲直りする」とは言えず、「考えておく」と決定を先延ばしするような言い方になってい

るのである。この後、「謝るんじゃない、ただ様子を見に行くだけだ」と雄ちゃんの家まで出かけていくが、仲直りする気がないなら「様子を見に行く」こともしないはず。この言葉からも、仲直りしたいと思っているのに素直になれない「僕」の気持ちが感じられる。

問6 ア～オの選択肢の内容はすべて「高井に言われたこと」である。高井が言ったことと言わなかったことに分ける問題ではない。「高井に言われたことが気にかかって、僕は起き上がった」とあることに注意する。「僕」が「気にかかって」仲直りのきっかけをつかむために雄ちゃんの家に出かける理由となった「高井に言われたこと」と、そうでないことに分ける。高井が一番気にしているのは、「僕」と小さいときからずっと友達だった雄ちゃんが仲直りすることである。そのような「僕」と雄ちゃんの関係についてふれている選択肢は、ア・イ・エ・オ。ウは高井と雄ちゃんの関係について述べているが、「僕」は高井と雄ちゃんの関係が「気にかかって」雄ちゃんの家まで出かけていったのではない。

問7 「僕」は「高井に言われたことが気にかかって」、雄ちゃんと仲直りするきっかけをつかもうと出かけたので、ア・オはあてはまらないし、オの雄ちゃんが「僕」にヤキモチを焼いているということは雄ちゃんのおばさんから聞いて知ったことでありこの時には知らなかったことなのでやはり不適切。この後、雄ちゃんのおばさんが家から出てきた時、向こうから見つけてもらえるよう「スピードを落と」しているのも、イもふさわしくない。まだ自分から謝る気持ちになれないので、「向こうから僕を見つけてくれて声をかけてくれ」ることを期待して、「雄ちゃんちの前を通過し」「同じ道をぐるぐると」回っているのである。

問8 「僕」にとって雄ちゃんは幼稚園のときから「いつも一緒だったし、楽しかったことは間違いない」友達であるが、高井が言うように「お調子者で、すぐなまけるし、気分屋」であり、ヤキモチ焼きで高井に意地悪をして「僕」とケンカをしてしまうようなところがあること。とはいえ、やはり気になって仲直りするために彼の家まで出かけてきてしまう存在であること、などから考える。

問9 「僕」が高井の肩ばかり持つと雄ちゃんがヤキモチを焼いているのは、雄ちゃんが「僕」のことを「大好きだから」である。だから、雄ちゃんのほうでも「僕」とケンカしたことを気にしていて、仲直りしたいと思っているが、「僕」が意地を張って自分のほうから謝ることができなかったように、雄ちゃんのほうでも意地を張っていて素直に謝ることができないのである。だから「オレ、会わねーから」とまだ意地を張っているものの、「僕」のほうから家に来てくれたことはうれしく思ったし、「僕」の様子が気になっているのである。